

分野横断的視点を取り入れた公民授業の構築

教育学研究科 教育実践創成専攻 教科領域実践開発コース 中等教科教育分野 小松夕稀

1. 分野横断的な学びの定義

平成 29 年告示の学習指導要領における社会科の指導計画の作成と内容の取り扱いでは、「小学校社会科の内容との関連及び各分野相互の有機的な関連を図るとともに、地理的分野及び歴史的分野の基礎の上に公民的分野の学習を展開するこの教科の基本的な構造に留意して、全体として教科の目標が達成できるようにする必要があること」と書かれている。

このことから、社会科を分類、専門化された教科だと捉えるのではなく、学校種という縦軸と分野や科目という横軸の関連を意識した指導が求められていると読み取れる。社会科教育の指導として、従来の分野別教育から脱却した 3 分野の連携した学びの提供が必要になるだろう。

以上を踏まえ、本実践における分野横断とは、地理的・歴史的視点、公民的な価値観を相互に関連付けることを指す。

2. 分野横断の先行研究

2-1. 分野連携的な見方

同指導要領の公民内容の取扱いには、「ア地理的分野及び歴史的分野の学習の成果を活用するとともに、これらの分野で育成された能力や態度が、更に高まり発展するようにすること」に配慮するよう書かれており、その取り扱いについては「(ア) 地理的分野、歴史的分野との関連を図り、現代社会の特色をとらえさせるようにすること」とある。



図 1

これは、中学校社会科の持つπ型の教科構造と関連していて、中学校 1・2 年生では地理的分

野と歴史的分野を相互に学び、3 年生では歴史的分野の後に公民的分野を学ぶ(図 1)。濱野(2023)は、この教科構造によって期待されるのは、一つには地理的分野と歴史的分野の併修という複合性、そしてもう一つには、それらの上に立った公民的分野の学習という段階性であると述べている。

また、濱野(2023)は、中学校社会科においては分野という構造をとって学びを進めることとなっているが、実社会において地理のみに限定した課題、歴史のみに特化した課題などといったものは存在しないため、各分野の見方・考え方を総動員した社会的な見方・考え方を働かせることが必要だと述べている。

このように、社会科としての最終的な目的は、公民的な資質を養うことである。このことから、地理と歴史を公民と関連させることは非常に重要であるため、細かく見ていく。

2-2. 発達段階的な見方

まず、中学校 1 年生の学ぶ地理的分野は世界地誌である。酒井(1993)は、特に経験的にみて、中学校 1 年生の 1 学期は小学校 6 年生と変わらないこと、更に、中学校 3 年生になると、こどもたちの読む力、考える力、書く力が急激に伸び、批判力も著しく高まることに注目し、地理的分野と公民的分野から、第三世界との繋がりを考える実践を行った。結論として、「中 3 (15 才) の思考力・記述力と、中 1 (13 才) のそれとは比べものにならない。その意味で、どうしても世界地誌を扱う中 1 の地理的分野と比べれば、公民的分野の学習が内容的に深くなるのは否めない。」「公民的分野に、地理的スキルは、予想以上に大切であると考え」と述べており、その必要性を指摘している。

このことから、発達段階的に 1 年時の地理的分野では深めきれない内容を公民的分野で取り扱うことは非常に重要であるといえる。また歴

史的内容も、公民的分野内でさらに発展した学びや議論ができるだろう。公民的分野では、地理・歴史の学習の総括の役割が求められていると考える。

2-3. 分野横断の実践

以下では、公民と地理・歴史の分野横断を目指した実践の紹介を行う。

黒田・山岡・後藤（2024）では、地理的分野と公民的分野の接続を意識した防災教育として、地理的分野で既習済みの地域の地形の特徴や災害リスクをもとに、避難所として妥当な新規避難所の検討と自治体への開設の要望活動を行い、高い防災意識をもつ市民育成を目指した実践を行っている。また、権田・今井（2014）では、地理で地域住民の水害に対する生活上の知恵を、歴史で地域の過去の災害を、公民では地域防災マップの作成を通して地方自治と街づくりの在り方について考える授業実践を行っている。

このように、先行研究を調べる中で、防災教育についての分野横断的な実践例は比較的多く存在することが分かったが、その他の単元での取り組みが少ないことに気づいた。

学習指導要領（平成29年告示）解説総則編の「付録6」に書かれている「現代的な諸課題に関する教科等横断的な教育内容」を元に、濱野（2023）が作成した資料（図2）を見ると、社会科3分野の関連が深い項目と、社会科として1分野のみでその単元の教育を担っている項目があることに気づいた。

中学校学習指導要領解説総則編付録6 「現代的な諸課題に関する教科等横断的な教育内容」として示された13の教育内容のうち、社会科各分野について触れた11の教育内容の記載分野の内訳	地理的分野	歴史的分野	公民的分野
伝統や文化に関する教育	○	○	
主権者に関する教育	○	○	○
消費者に関する教育			○
法に関する教育			○
知的財産に関する教育			○
郷土や地域に関する教育	○	○	○
海洋に関する教育	○		
環境に関する教育	○	○	○
心身の健康の保持増進に関する教育			○
食に関する教育	○		○
防災を含む安全に関する教育	○		○

図2
分野横断できる単元でのみ横断的な内容をや

るのではなく、公民的分野においては、地理・歴史の学習成果を活用した学びが求められるため、図2の公民のみで担っている単元での実践を試みることにした。

3. 授業実践報告

3-1. 研究目的

本研究では、中学校社会科において、現代社会を地理的・歴史的視点(分野横断的視点)との関連から考えることで、多面的に考察できる公民授業の構築方法について探った。また、中学校社会科における分野横断の必要性について、生徒の実態や学習効果を基に分析し、その重要性を明らかにすることを目的とした。

先述した通り、中学校社会科は、地理、歴史、公民という3つの分野に分かれている。しかし、これらの分野は独立して存在するものではなく、社会問題や現代の複雑な課題に取り組むためには3分野横断的な見方・考え方が必要である。

そのため、また、授業開発の少ない分野においての授業実践を目指した。

3-2. 実践時期と対象

本研究の背景と目的は以上見てきたとおりであるが、ここからは、具体的にどのような授業を行ったかを報告する。

- (1) 対象校...山梨県内の公立中学校
- (2) 対象生徒...第3学年3クラスの生徒79名
- (3) 期間...令和6年11月上旬から11月中旬にかけて
- (4) 授業範囲...東京書籍「新しい公民社会」

第4章 私たちの暮らしと経済 (pp.130 - 139)

第1節 消費生活と市場経済

- 1 私たちの消費生活
- 2 契約と消費生活
- 3 消費者の権利を守るために
- 4 消費生活を支える流通

3-3. 授業の詳細

実施した全4時間のうち、第1時では歴史的分野との関連を、第4時では地理的分野と歴史

的分野との関連を図った。本論文では『武士の家計簿』を使用した第1時の実践授業をメインに取り上げることとする。公民的分野と歴史的分野の横断的な授業で『武士の家計簿』を使用した事例は今までにない実践である。それに対し、公民的分野と地理的分野の横断的な授業として「フェアトレード」を扱う実践は今までにも存在しているためである。

1時間目は、私たちの暮らしと経済の学習の一環として、江戸時代の「武士の家計簿」を通して「現代の平均的な家計簿」を考えることで、「私たちの家計簿シミュレーション」を作成する際の基礎となる考え方を身につけさせた。これは、家計の管理や経済の基本原則について理解を深めることを目的としたものである（図3,4,5）。

現代の平均的な消費支出	月額	割合	武士の家計簿支出	月額	割合
食料	43,000円	14%	食料	196,537円	18.2%
住居	30,000円	10%	住居費（家賃なし） 修繕	4,980円	0.4%
光熱・水道	7,000円	2%	光熱費（油・炭・まき）	88,427円	8.3%
家具・家事用品	3,000円	1%	用品	35,033円	3.3%
衣服及び履物	9,000円	3%	保険医療 医薬代	28,337円	2.7%
交通・通信	25,000円	8%	交通・通信 輸送駄賃	4,147円	0.3%
交際費	11,000円	4%	交際費（身分費用） 祝儀・手土産 他	487,086円	45.2%
教養娯楽	17,000円	5%	その他の消費支出	85,197円	7.9%
その他の消費支出	14,000円	5%	税金・社会保険料	147,373円	13.6%
税金、社会保険料など	54,000円	17%	預引き	597円	0.05%
預貯金	70,000円	22%	計	147,970円	13.7%
その他	27,000円	9%	総合計	1,077,714円	100%
合計	310,000円	100%	借入返済額	324,033円	

図3：家計簿比較

交際費内訳		
項目	詳細	金額
交際費	祝儀・手土産他	94,803円
家族配分額（給料日に家族へ配る金）		
家来（2人）への給料		51,827円
儀礼・行事費（子供の成長行事に）	お食い初め 七五三	25,363円
寺社へ付届け		26,820円
無忌代（頼母子講）		152,133円
合計		487,086円

図4：江戸時代の交際費内訳

項目		金額
消費支出	食料	A. 7万円（豪華な食事、外食が多い） B. 5万円（普通、C. 3万円（質素な食事、自炊する）
	住居	A. 7万円（新築、駅に近い） B. 5万円（普通） C. 3万円（古め、駅から遠い）
	光熱・水道	7,000円
	家具・家事用品	3,000円
	被服及び履物	9,000円
	交通・通信	25,000円
	教養娯楽	A. 5万円（多い） B. 3万円（普通） C. 1万円（少ない）
	交際	11,000円
	その他の消費支出	14,000円
	税金、社会保険料など	54,000円
	預貯金	A. 5万円（多い） B. 3万円（普通） C. 1万円（少ない）
	その他	27,000円

図5：家計簿シミュレーション

特に、収入と支出のバランス、消費や貯蓄の考え方、経済的な工夫といった観点から、過去と現代の家計の共通点と相違点に焦点を当てた。

導入では、映画『武士の家計簿』の七五三の場面を視聴し、「なぜ本物の鯛の代わりに鯛の絵を使ったのか」という問いを投げかけた。そこから、江戸時代の武士の経済事情に興味を持たせ、現代と比較しながら家計のあり方を考察した。

その際、生徒の意見を引き出しながら、「武士の家計は厳しく、贅沢ができなかった」「見栄や形式が重視された」「格式を保つことは武士にとって重要であった」という点に気づかせた。



図6

さらに、当時の武士の様子が分かりやすいように「武士は食わねど高楊枝」ということわざを使った。これは、たとえ貧しい境遇にあっても、貧しさを表に出さず気位を高く持って生きるべきだという武士の生きざまを表している（図6）。武士を使ったこのことわざは、やせ我慢することのたとえであるということから、武士がどれだけ世間体を気にしていたのかを理解させた。

展開では、家計とは何か、家計をやりくりするとはどういうことか、という学習内容に発展させ、（図3,4,5）から武士の家計の特徴を考察させた。

図3には、「現代の平均的な家計簿」と江戸時代の「武士の家計簿」の比較資料が載っている。生徒には、この資料を見比べるとどんな違いがあるのかを考えさせた。このとき、「武士の家計簿」の項目を現代の家計簿と同じ支出項目になるように統一した。この工夫は、項目が多く読み取りにくい資料になることを避けるために行ったものである。さらに、金額だけでは額が大きす

ぎて分かりにくいことを懸念し、各項目に占める割合の記載も行った。

つづいて、現代の家計簿では、預貯金の占める割合が高いのに対し、武士の家計簿では交際費が全体の半分近くを占めているということに着目し、交際費にはどのような項目があるかを確認した（図4）。ここでは、交際費は親戚への手土産代や家族へのお小遣い、家来への給料、冒頭で見た七五三のお祝いなどの行事費など、人との関係のためにお金を多く使っていたことを確認した。そして、なぜ人との関係にお金を多く使ったのかを考えさせた。この問いから、「武士は親戚との関係を大切にしていた」「見栄を張るために行事を豪華に行っていた」「格式を保つために、今でいうチップ（手間賃）を家来に渡していたから」などの内容を確認した。そこで、なぜ武士は親戚との関係を大切にしていたのかを解説し、理解させた。現代は、銀行や会社からお金を借りることができ、国からお金をもらうこともできるが、当時はそんな経済の仕組みや制度はなく、親戚からお金を借りるしかなかったことを説明した。これにより、生徒の中から「借金相手である親戚との付き合いを保つ為に、都度手土産を渡す必要があってお金がかかった」という気づきが生まれていた。また、寺社への付届けは、今でいう社会保険に近い仕組みであることから、寺にお金を納めることで自分たちの立場を守っていたことを説明した。

これらのことから、「武士の家計簿で収入よりも支出の方が多いのは、借金をしてでも見栄を保つ必要があったから」「現代は、交際費や娯楽に回すお金よりも、税金や貯蓄にかけられるお金が多い」というように、当時と現代の価値観や時代背景を捉えたうえで、生徒一人一人に家計簿シミュレーションをさせた（図5）。限られた収入の中で、食料・住居・教養娯楽・預貯金にいくら使うか考えながら作成させた。その際、武士の家計簿や現代の家計簿を踏まえて、収入と支出のバランスに気をつけながら考えさせた。

3-4. 教材とその取扱い

学習指導要領における公民的分野の目標には、

国民の生活の向上と経済活動の関わりを諸資料から効果的に調べ、まとめる技能を身につけるようにすると書かれている。この文言からは、経済活動を単なる消費者行動の理解などに留めず、生活から経済の歴史的変遷を踏まえた考察が求められていることが読み取れる。したがって、過去の消費生活や家計管理の実態を学ぶことは、現代の経済活動の成り立ちを理解する上では有益な活動であると言える。『武士の家計簿』は、過去の家計管理の実態を具体的に示す史料として有効であり、生徒が家計の仕組みを実感をもって学ぶための教材として適していると考えられる。

『武士の家計簿』は、江戸時代の武士である猪山家の家計記録をもとに、武士の収入・支出・節約の工夫を描いたものであるため、本書を活用することで、生徒はと過去の家計を参考に現代の家計を見ることで、経済の仕組みの変遷を理解することができるのである。

『武士の家計簿』には、武士が借金を抱えながらも贈答品や儀礼費用を重視する文化が描かれている。これは、現代社会を生きる私たちにはない文化であるため、「なぜだろう」という疑問を抱き、興味関心を持って学びに向かうことができるだろう。また、この視点から、「なぜ節約が必要なのか」といった問いを生徒に考えさせることで、自分の消費行動をより深く理解する契機となる。

4時間目では、希少性や流通の内容から発展させて、フェアトレードを取り扱った授業を行った。授業内では、自立した消費者として、店頭で売られている商品の値段や特徴から、その商品に携わっている人たちの思いや背景を考えると、公正・効率の観点から商品と向き合うことの重要性を伝えた。買い物は投票であるということ伝えた後に、SDGsの取り組みの一つ、「12つくる責任つかう責任」と関連して、エシカル商品を紹介した。

この単元の一連の流れから、歴史的価値観のもと、現代のエシカル消費について学習したことで、最終的に倫理的な消費活動について考えさせることができた。

4.アンケートの実施

授業の前後にアンケートを実施した。授業前アンケートでは79人中69人、授業後アンケートでも、79人中69人の生徒が協力してくれた。

4-1.ねらい

- ・授業を受ける前の生徒それぞれが持つ、社会科目3分野の繋がりに関する認識を収集し、授業後にその認識がどのように変容するかを把握する。
- ・生徒に自分自身が持つ社会科目3分野の繋がり意識や具体例を書かせることで自分の学習観を認識させる。

4-2.アンケート項目

以下の6項目について、(とてもそう思う・ややそう思う・あまりそう思わない・全くそう思わない)の四件法とその理由について尋ねた。

- 公民の学習と地理の学習は繋がっている
- 公民の学習と歴史の学習は繋がっている
- 歴史の学習と地理の学習は繋がっている
- 社会科の学習は、日常生活と繋がっている
- 武士の家計簿を経済の授業内で扱ったことにより、学びが深まったと思いますか？
- カカオ豆(フェアトレード)を経済の授業内で扱ったことにより、学びが深まったと思いますか？

4-3.アンケートの結果

まず、「a 公民の学習と地理の学習は繋がっている」についての結果を見る。

授業前

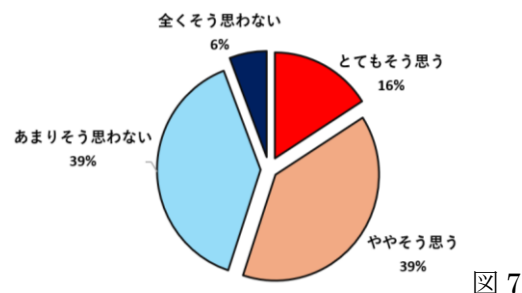


図 7

授業後

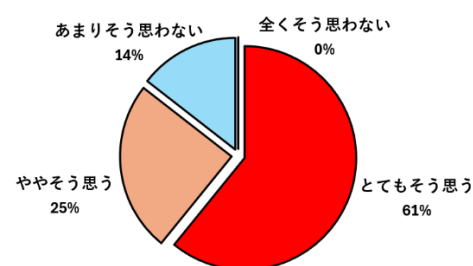


図 8

公民と地理の学習の繋がりを感じる生徒は、授業前は全体の半数程度だったが、授業後は全体の8割にまで増加した。中でも、「全くそう思わない」から「とてもそう思う」に変わっている生徒Aの記述を見ると、「地理と公民の共通している点が思いつかないから」という内容から、「カカオ豆で経済を回している国は、赤道に近い国だから」というように、授業内容を踏まえての記述であり、大きな変化が見られた。また、生徒Bは「あまりそう思わない」から「とてもそう思う」に変化しており、記述を見ると、「地理と公民の接点がありまだ分かっていないから」という内容から「先生の授業を受ける前は、あまり地理と公民の学習は関わっていないなと思っていたけど、四時間目の授業で公民と地理の学習は混ざっていることが分かったので良かった」というように、繋がりを感じることができていた。このことから、「フェアトレード」の実践を得て、多くの生徒に社会科の横の繋がりを感じさせることができた。

次に、「b 公民の学習と歴史の学習は繋がっている」の結果を確認する。

授業前

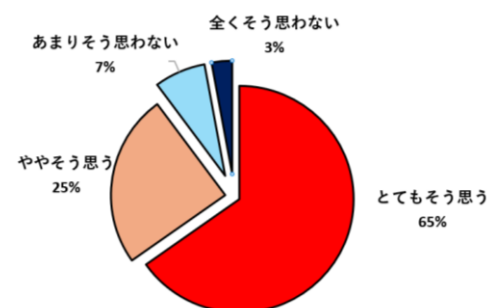


図 9

授業後

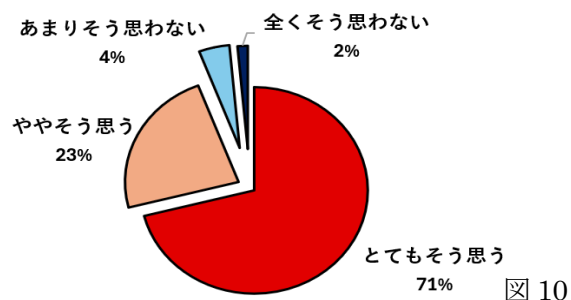


図 10

公民と歴史の学習の繋がりを感じる生徒は、元々多かったものの、更に肯定的な意見が増えた。生徒 C は、「あまりそう思わない」から「とても思う」に変化しており、記述を見ると「歴史は古くからの日本を主に学ぶが、公民は現代のことを学んでいて、接点がないから」という意見から、「古くからの国の文化によって現状も変わっていると知れたから」のように、昔があったからこその今であるという理解を育むことで、繋がりを感じさせることができた。

つづいて、「c 歴史の学習と地理の学習は繋がっている」のアンケート結果を見る。

授業前

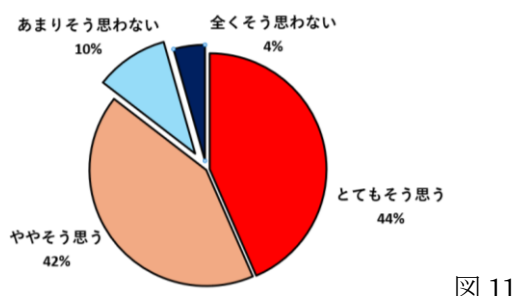


図 11

授業後

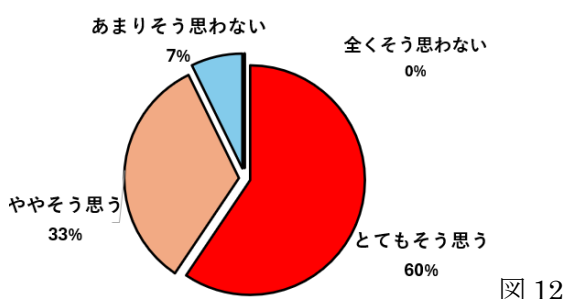


図 12

地理と歴史の学習に関しては、授業前よりも繋がりを感じさせることができ、授業後には全くそう思わないと感じる生徒が一人もいないこ

とが大きな変化である。生徒 D は「あまりそう思わない」から「やや思う」へ変化しており、記述内容を見ると、「歴史と地理の学習が繋がっていない気がするから」という内容から、「その地域の気候や立地で育ちやすい農作物や鉱産物があり、それに頼りすぎてしまうとモノカルチャー経済になってしまい、経済にも影響が出ると知ることができたから。昔、植民地にされ特定のものしか生産できなくなってしまい、それが開放されたとしても、支配下に置かれていた国が不利益にならないかと思った」というように、授業の内容を踏まえて自分なりの考察する形で考えを書くことができていた。このように、具体的な繋がりを感じさせることができた。

そして、「d 社会科の学習は、日常生活と繋がっている」の結果を確認する。

授業前

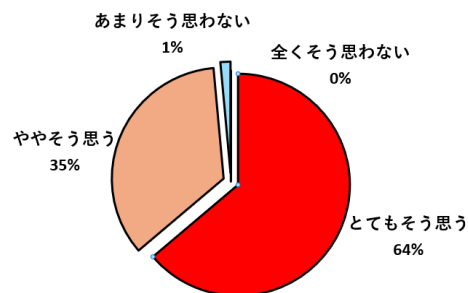


図 13

授業後

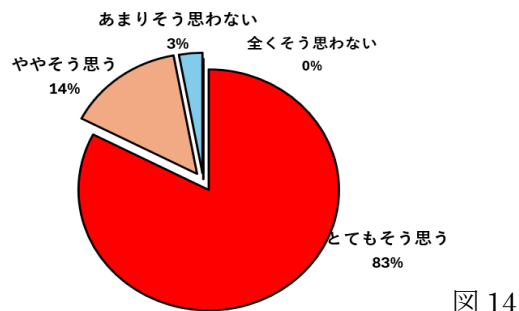


図 14

社会科と日常生活の繋がりに関して、授業後は 9 割以上の生徒に繋がりを感じさせることができた。授業前後を通して「とても思う」と回答した生徒 E の記述を見ると、「特に公民は、わたしたちの生活に関わる部分を勉強しているから。」という抽象的な内容から、「公民や地理は特に私達の生活に関係していると思う。今回学習した流通や消費者としての考え方など、今後

の生活に必要なことばかりだったから」というような具体的な内容に変化していた。また、生徒E同様に前後を通して「とても思う」だった生徒Fは、「この間の選挙など、自分たちが政治に関わることもあるから」と、あまり身近には捉えてない他人事のような記述から、「自分がなにかを買う消費者として経済を回す一員であることを授業で知れたから」と、自分事として社会科の知識と日常の繋がりを感じることができた記述に変化していた。中学生にとっては社会の仕組みなどをあまり身近に感じることができないことも多々あるだろうが、この授業を通してそれが変化したのではないだろうか。

本報告のメインである「e 武士の家計簿を経済の授業内で扱ったことにより、学びが深まったと思いますか？」の結果は以下の通りである。

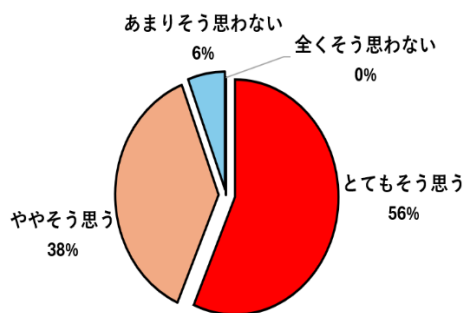


図 15

この結果から、多くの生徒に学びの深まりを感じさせることができたと考える。生徒の記述を見ると、「経済の話単体でされるより、歴史のことに掛け合わせて説明してもらったほうが、楽しいし新しい知識を身につけられたと思うから」や、「昔の武士が重要視していた項目と、現代の人が重要視している項目の違いがわかったし、自分だったら何に使うか考えを深めることができたから」などのように、比較することを通して学びを深められたことが分かる。否定意見としては、「学びを深めるより楽しんで見てしまったから。でも授業は楽しかった」のように、楽しさの中に学びの追求が見られなかったとの記述があった。

最後に、「f カカオ豆（フェアトレード）を経済の授業内で扱ったことにより、学びが深まったと思いますか？」の結果を確認する。

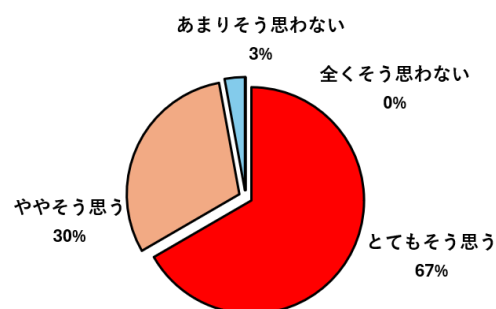


図 16

この結果から、フェアトレードについても9割以上の生徒が学びの深まりを感じることが出来たことが分かった。生徒の記述には、「フェアトレードという事を今まで知らなかったの、植民地になっている国は何が大変なのか、自立した消費者になるためには何が大切なのかをこの授業で知ることができたので学びが深まりました」というように、公民の学習内で地理の内容を扱ったことで、知識を関連付けて理解しているような記述が見られた。また、「カカオ豆を通じてモノカルチャー経済の国の製品の問題（値段設定が不当など）について僕達消費者は何を考えるべきなのかを知ることができたから」という記述からは、地理の内容から発展し、公民としての資質能力の育成ができたことと考えられる。否定意見としては、「割とそのことについては知っていたから」という意見もあった。

5.本研究の成果

歴史的分野との連携の成果として、江戸時代の『武士の家計簿』を元に現代の家計簿を考察したことで、消費の特徴には社会の仕組みや価値観が影響することを掴ませ、自分の消費の軸となる価値観を考えさせることができたこと、比較することで得られる学びがあることを伝えられたこと、過去との結び付きで今があることを理解させることができたという3点がある。

地理的分野との連携の成果として、既習のアフリカの地理的・歴史的知識をもとに、フェアトレード商品について考察を行ったことで、自立した消費者としての考えを確立させることができたことが挙げられる。

公民的分野の成果として、私たちの暮らしと経済の学習における基礎知識はもちろん、値

段の高い、安い商品の背景を考えながら消費活動を行う必要性について考える学びを行うことができ、公民としての資質能力を育成することができた。これにより、公民としての目標を達成しながら、分野横断を行うことができたと感じている。

6.課題と今後の展望

6-1.課題

公民と歴史の分野横断的な授業を行う際の反省点として、歴史との比較の際に、現代の価値観から安易に判断してしまうと生徒の自由な考えを阻害してしまうと感じた。例えば、「借金があるのに交際費にこれだけの大金を使うのはどうかな。あまり良くないよね」などの問いかけにおいて、教師の主観を強く出し過ぎてしまったかもしれない。

また、江戸時代の武士の経済文化は、現代の経済とは大きく異なっている。そのため、単に家計簿のデータを示すだけでは、生徒がその背景を理解しにくいという課題がある。教師がどれだけその背景を理解し、分かりやすく説明出来るかが課題となってくる。

さらに、中学生は実際に家計を管理する立場になく、収入と支出のバランスを考えることが難しい。過去と現代の家計簿の比較を行ったからといって容易に自分の家計簿を作れるものではないことが分かった。

6-2.今後の展望

本授業を通じて、生徒は家計管理の重要性を理解するとともに、江戸時代と令和時代の経済を関連付けて考える力を育むことができた。歴史的視点から家計を考察することは、経済の変遷や社会の価値観の違いを理解することにつながる。今後の経済教育において、本教材の活用をさらに進めることで、生徒の主体的な経済理解を深めることが期待される。

江戸時代の武士の経済文化は、現代のそれとは大きく異なる。この学びを活かし、江戸時代と現代で比較したことを他の時代でも行うなど、今後も実践的な活動を取り入れ、主体的に経済

を学ぶ機会を増やしていきたい。

○. 参考・引用文献

- ・文部科学省（2019）『中学校学習指導要領（平成29年告示）』学校図書
- ・磯田道史（2013）『武士の家計簿 「加賀藩御算用者」の幕末維新』新潮新書
- ・濱野清（2023）「中学校社会科における分野連携の必要性」帝国書院
- ・酒井喜八郎（1993）「子どもの発達段階から見た社会科における地理的分野と公民的分野との関わりについて第三世界の授業例を通して」『新地理』40（4）
- ・黒田圭介・山岡貴秀・後藤健介（2023）「中学校地理における微地形判読を通じた水害ハザードマップの評価活動事例」『日本地理学会発表要旨集』
- ・黒田圭介・山岡貴秀・後藤健介（2024）「中学校地理的分野と公民的分野の接続を意識した防災教育実践－新規避難所の検討と自治体への開設の要望活動を事例に」『日本地理学会発表要旨集』
- ・權田与志道（2014）「中学校社会科地理・歴史・公民の分野連携による防災教育の公立中学校における実践」『日本地理学会発表要旨集』
- ・權田与志道、今井幸彦（2014）「中学校社会科における防災教育の実践－地理・歴史・公民の分野連携を目指して－」『新地理』62(3)
- ・故事ことわざ辞典
<https://kotowaza-dictionary.jp/k0071/>
- ・illustAC
<https://www.ac-illust.com/main/detail.php?id=2325903>

謝辞

本研究を進めるにあたり、貴重な授業実践の機会を与えてくださった実習校の先生方、温かくご指導くださった指導教官の先生方、そして協力してくれた生徒の皆さんに厚くお礼申し上げます。